

林家一族

林家の子供たちは皆、話が上手で社交に長けている。これは両親の開明的な子女教育のおかげである。

日本の植民地時代。台湾人の学ぶ最高学府は医学校と国語学校の二系統。敏生の父・春雨は国語学校、のちの台湾師範学校に学んだ。母・呉金瓦もまた同校付属の女子中学校を卒業して、ともに教職にあった。当時の教師は社会の尊敬を集める神聖な職業であり、収入も安定していた。

母は二十五、六才で父に嫁いだ。当時としてはかなり晩婚であったが、四十二才まで子供を生み続けた。「大きなお腹を抱えて」教壇にのぼることの多かつた母は、仕事と家事と子育てで大変だったに違いない。一つ年上の姉さん女房。近隣には聞こえた美人で、しかも家庭内の規律を取り仕切る威厳をそなえた母であった。敏生をはさんで七人兄弟。掃除や家庭内の仕事は七人平等に分担。終わらなければ学校にも行かせてもらえなかつた。そんな母親のことを子供たちは「西太后」のようだったと述懐する。一方、子供の養育係りを任じていた父親だが、百元かせげば百十元使ってしまう気前の良さは、子供たちにとって見れば、生活を楽しませてくれる「娯楽の王様」と映った。父親との思い出はすべて、子供時代への楽しい追憶に重なる。

内風呂のある家などめずらしく、誰もが銭湯にかよっていたあの時代に、新しがり屋の父親は、大枚払って風呂桶を買ってきたことがある。隣人の好奇の目に囲まれて「開桶式」を挙行了したまではよかつたが、当時まだ四才になったばかりの長男が、好奇心から思わず煙突に手を触れて火傷を負い、

慌てて医者に連れて行くといった一幕もあった。

当時、映画といえれば気の利いた高級な娯楽であったが、子供にとっては、休憩時間を買ってもらおうお菓子とラムネの方がよっぽど魅力的だった。どんな映画も見逃さないのが林家のしきたり。日本時代には日本映画、国民党政府が来てからは中国映画、民国四〇年（一九六五年）前後に日本映画の禁令が解けてからはまた日本映画。林家の子供たちはみな大の映画ファン。俳優、ストーリー、主題曲と、宝石箱をぶちまけるように、話はいつまでも尽きない。

日本教育の中で育った林家には、娯楽にも国境がなかった。国民党政府の時代になると今度は京劇見物。いつも子供たちを連れて行く父親のおかげで、京劇の名優や名作、数々の名場面を敏生は今でもはつきりと覚えている。

物騒なああの時代に、戦争とはほとんど無縁の平和で愉快な日々を送った敏生は、「とにかく一日中楽しかった」当時の思い出を、両親の賜物だと、今も感謝を忘れない。

敏生の父はしかし、趣味だけの人ではなかった。敏生が、ほとんど日本人しか入園できなかった「大正幼稚園」や、一クラス四〇人中台湾人わずか四、五人の「寿小学校」に入学させてもらえたのを見ても、その教育熱心ぶりが伺える。

当時、台湾人の児童は「公学校」に入学するのが普通。日本人の多い学校に入学するのは容易ではない。父親の努力も並大抵のものではなかった。面接試験の前にはしつこいばかりの予行練習を繰り返し、合格すると今度は、子供をつれて先生の元へ、これもしつこいばかり懇ろに指導を乞う。

入学させるのは名門校、という信念は絶対の両親だったが、入ってからの学業は子供の自発性に任せ、成績にはあまりこだわらなかつたから、学校に入っても林家の子供たちは、相変わらず家事手伝

いを日課とし、映画や京劇を楽しみ、蔵書を耽読する日々を過ごした。こうした自由闊達で多彩な家庭教育は、子供たちの性格形成や将来の生き方に、決定的な影響を与えた。

林家は四兄弟三姉妹。敏生を境に上の一兄二姉と敏生本人は日本教育、下の二弟一妹は日本撤退後の本土教育だから、一家の中に日本語・中国語の二大言語体系が並存していることになる。兄弟姉妹の仲はいたって良いが、敏生はこれを、当時の政局がもたらした「文化の断層」と呼んでいる。

子沢山の家庭では、一人一人にかまっておられず、子供はめいめい勝手、わが道を行くという場合がままあるが、林家では母親の躰で、誰もが家族の一員として相応の責任を持たされ、上のもものは下のもの、の面倒をよく見た。子供たちは毎朝の登校から、持ち回りの料理、買い物と、とにかく毎日、ぎやかだった。

こういう和氣藹々の雰囲気の中で培われた兄弟愛を、林敏生は「心の財産」と表現する。この伝記を作るため一堂に会した折も、数々のエピソードが披露される談笑の中に、往時の記憶が次々とよみがえり、時には当の本人が忘れていたことまで誰かが覚えていたといった始末。「違うよ!」「そうだよ!」「ええ、そうだったかなあ!」。思い出を共有している安心感で、子供のころに返ってむきになつたりもする。

「日本語はみんな上手なのに、飯の種にしたのはおまえだけ。一度おごってもらわなきゃね。」という上の姉の言葉に、敏生は兄弟姉妹六人とそのつれあいを日本旅行に招待。夫人と本人を加えて十人の団体旅行は前後三回。一回の出費は百万元を下らないが、敏生は、「仲が良いから年をとっても一緒に楽しくやれる。金を出しても口を出さずじゃないよなんて、遠慮のないことも平気で言ってくれる。有難いことだ。」と、気にするどころか、兄弟と過ごす一時を存分に楽しんでいる。事業に

成功しても家族のことを忘れない。彼は今でも、気前のいい兄貴であり、兄弟思いの弟なのである。

林敏生の家族思いは、原則と事細かな配慮で貫かれている。この点、彼の弁護士気質が余すところなく表われていると言えらるだろう。

縁が薄いというのか、お見合いもしたがらず、三十を過ぎても片付かない婚期の遅れた妹に、ようやく好きな人ができた。相手は台大農工出身の米国留学生。米在住で離婚歴一回。両親は口にごそしないが、ようやくめぐってきた娘の幸福に、内心喜んでいたので、相手の離婚歴を気にする様子もなかった。相手の兄という人は医者で、結婚の申し込みにはその夫人が連れだってきた。この医者夫人の横柄な態度にカチンと来ていた敏生は終始黙っていたが、相手が勝手に結婚の日取りを決めようとするに及んで、無愛想に口を開いた。

「縁談話をもって来られたということは将来、わが両親は貴殿にとっても、親同然の人になるかもしれない。もう少し礼儀をわきまえたらどうか。それに貴殿の言葉は、英語と日本語がごちゃ混ぜで意味不明である。英語なら英語、日本語なら日本語、どちらかにしていただけでないか。また聞くところでは貴殿には離婚歴がある。前妻とはどのような条件で別れたのか。将来、妹との結婚生活に影響するようなことはないか。はっきりさせてほしい。」

こう言われて相手は顔面蒼白。傍で聞いていた両親と別室で聞き耳を立てていた妹は冷や汗たらたら。どうなることかと案じられたが、三日後、当時すでに独立していた敏生宅に、相手の兄が夫婦そろって来訪。門を開けると、まずは深々のお辞儀。手土産もあれこれと念が入っている。ひとしきり話をしたあと早速、アメリカの弁護士で友人のオルデンバーグのもとへ。前妻との関係、離婚の条件などをはっきりさせ、嫁いだあとの妹の権利についても話し合った。

晴れの日。親友たちの見守る中、妹の指に結婚指輪が……。その瞬間、敏生の目には涙が光った。込み上げる喜びを隠せなかったのである。

兄敏生に妹は、一時はどうなることかと腹も立ったが、一生涯感謝することになる。兄のしてくれたことは、現実問題として、将来の結婚生活に配慮したものだからである。

母親が亡くなって二年後、敏生はわざわざ休暇をとって、父親を日本旅行に誘った。

父親に思いっきりくつろいでもらおうと、敏生は旅行中、あれこれと心を砕いた。東京に行けばお堀端の最高級レストランで食事をし、京都に行けば最も格式ある旅館に泊るといった具合に、「大名旅行のようだ」と父親が感激するほど、豪華な旅行であった。

ある雨の日、旅館の一室で敏生は父親と向き合い、テープレコーダーをオンにしたまま二時間話し続けた。この時の録音テープは大事な形見。何度も聞き返しては父を偲んだ。

父は一九八〇年の春節に世を去った。短い間だったが、「羽振りのよい」生活で父の晩年を飾れたことに、敏生は自らを慰めた。父は宵越しの銭を持たない気前のいい人、タクシーに乗ってもお釣をもらったことのない人だったから、借財返済の日々を送らせるのは気が引けた。月一万五千元の小遣いは、兄弟から「相場を勝手に上げるなよ」と揶揄されたほどだが、父には好きなだけ思いっきり使ってほしかったのである。

旧暦の正月一日。大晦日の夜を家族だんらんで過ごし、十二時までマージャンをしてから各自帰宅した兄弟たちのもとに、父の訃報が届く。俄には信じられないほど意外な父の急逝。ほんの数時間前、満貫のパイを手にして紅潮した父の顔。その可愛い様子に思わず駆け寄ってキスしてしまったほど、父はいきいきとしていたのに。

京都の旅館で録音した例の「対話集」に、事業パートナーの解散、立て直し、債務返済から経営の好転にいたる敏生のサクセスストーリーと、それを聞き終わった後の父と子の短い会話が残っている。

父「失敗を乗り越えて最後の勝利をものにする。お前もなかなか大した奴だ。」

敏生「借金の返済で鍛えてもらったおかげです。」

父「皮肉か？お前」

敏生（深々と頭を下げて）「いいえ、心からそう思っています。」

読書の楽しみ

林家の蔵書の豊かさは、日本時代にあってはまれである。林家は近隣に聞こえた「書香の家」。その文化的雰囲気は、よく友人から羨ましがられた。敏生自身も「サロンのような」家を誇りに思っていた。

家の中二階には、長編、中編小説や『講談社倶楽部』、『幼年倶楽部』、『少年倶楽部』、『婦人の友』、『キング』などの雑誌が、うず高く積まれていた。文学少年というわけではなかったが、家にある本は手当り次第に読みちらかした。その中に成人向けの本がだいたい混じっていたことは、ずいぶん小さい頃に「子供がどうして生まれるのか」を知っていた事実からも分かる。